

スーダン南部地域 UNHCR現地事務所開設奮戦記

ユニエイチサークル
UNHCR 本部職員である米川正子(よねかわまさこ)さんは、2005年5月から10月までスーダン南部第2の町であるマラカル(Malakal)に滞在し、事務所長を務めました。スーダンの現地の状況を東京で1月6日にお聞きしました。



現地の米川さん(左)

Q マラカルとはどのような町なのですか？

A スーダン政府側(北)が支配していたのですが、2005年1月のスーダン南北和平合意を受けて、7月からSPLM(スーダン人民解放運動)の管理下に入っています。首都ハルツームとジュバの中間でナイル川沿いに位置する南部第2の都市です。かつてはカジノや映画館もあり、新婚旅行先として人気のある美しい町だったそうですが、内戦によって破壊しつくされ、地雷が町の周りに埋められています。

Q 滞在中はどのような状況でしたか？

A 5月から10月までは雨季だったので町中が水浸しでしたが、難民や国内避難民が自主的に帰ってきていました。すでに10の国連機関と13のNGOが事務所を設けています。とにかく道路事情が悪く、物資輸送はスーダンの首都ハルツームからの空輸や、より割安なナイル河の水上輸送に頼りきっていました。

Q UNHCRの現地での役割を教えてください。

A 援助対象は周辺国からスーダンに戻ってきた帰還民、北側から逃れてきた国内避難民、さらにその地域に住む地元住民やエチオピアから流出してくる難民です。帰還状況の把握、ナイル河に沿って帰還民の中継所建設、帰還民の多い村に関する調査など、やるべき事はたくさんあるのですが、問題も山積みでした。

Q 最初はどのような問題に直面したのですか？

A UNHCR事務所開設のために、私はまず一人で現地に入りました。事務所を借りたくても候補となる物件があまりなく、宿泊場所も転々となりました。軍閥との関係をなるべく排除したいものの、家主にせよ現地職員候補にせよ、誰なら大丈夫なのかははっきりとはわからない点も不安でした。女性であるがゆえに甘く見られる面もありました。さらに、雨季には道路が水浸しで河川交通に頼

るしかなく、ボートがないと村を訪問することさえできません。スピードボートが到着するまでの4ヵ月間、他の援助機関から借りてなんとかやり繰りしました。

Q 支援活動を始める準備だけでも相当大変なのですね。

A 安全・移動・輸送の確保が最大の問題でした。武器の氾濫、地雷や軍閥の存在、湿地や洪水によって、移動や輸送が制限されてしまいます。この悪条件の中で、難民の帰還計画を本格化させるのは簡単ではないと感じました。とりわけ輸送手段の不足は深刻です。スーダンは日本の約6.6倍もある大きな国ですが、UNHCRが8ヵ所の拠点を持つスーダン南部で使える飛行機は1機しかなく、もう1機必要です。国内避難民の多くが移動に使っている貨物船にはフェンスがなく川に転落する危険が高く、さらに寝転ぶ場所やトイレも限られているので、客船を用意する必要があります。また、重要な国境地点などを訪問できない理由が、湿地とか安全の問題だけでなく、適切な移動手段がないだけという場合もあります。

Q そのような厳しい状況に、どのように対処したのですか？

A 最初は一人でしたが、同僚が到着してからは良い仲間恵まれて結構楽しかったですよ。UNHCRの緊急援助派遣スタッフリストに登録している職員が数ヵ月単位で派遣されるのですが、ケニアに赴任していた高嶋由美子さんともう一人の職員が加わってからは、共に合宿生活を楽しましました。もともと冒険好きな私にとってアフリカの現場に根差した仕事は向いていると思っています。

Q これまでも、世界各地で援助活動に関わってきたそうですね。

A 1992年にカンボジアに選挙監視員として派遣された後、リベリア、南アフリカ、ソマリア、タンザニアでの活動に参加しました。1996年にUNHCR職員となって、ルワンダで難民の帰還と再定住を担当しました。1998年からケニアを拠点とする巡回フィールド担当官として東アフリカ諸国を巡り、2001年からはコンゴ民主共和国でアンゴラ難民の帰還計画作りに携わりました。2003年にジュネーブ本部で高等弁務官補佐官に



貨物船でさまざまな物資が運ばれる

なりましたが、昨年初めには津波で被災したインドネシアのアチェに2ヵ月間派遣されました。

Q 今後、スーダン難民が故郷に戻るためには、何が重要だと感じますか？

A 国内のインフラ整備に加えて、とくに教育環境の整備と安全の確保が大切です。たとえ校舎があっても、教員が不足しています。難民キャンプでは最低限の教育を受けられるので、子どもの学校が整っていないと親は帰還を躊躇するものです。さらに、元兵士の武装解除、雇用・教育機会の提供を早急に進める必要があります。

Q 日本の支援者の皆さんにメッセージをお願いします。

A 日本が戦後に発展できたのも、阪神大震災後にすばやく復興できたのも、国民の努力だけでなく、国際社会からの支援があったことを忘れてほしくないです。今のスーダンは、戦後の日本と同じようなものです。自ら国づくりに努力している人々もいます。たとえば、難民として滞在したケニアから持ち帰った教科書を使って、自主的に成人学校を開いている帰還民と会い、大変感銘を受けました。しかし、個人の力には限界があり、外からの助けが必要です。「スーダンは遠い国だから自分たちと関係ない」という考えは、今の世界では通用しません。困っている近所の人を助けるような感覚で、スーダンの人づくり、国づくりを支援していただきたいと思います。そのためには資金援助だけではなく、スーダンに興味を持ち、知ったことを周りの人と共有することも大事です。近い将来、南スーダンが舞台となるハリウッド映画ができるので、それをきっかけとしてスーダンのメンタル・サポーターが増え、国の和平につながるよう祈っています。

写真提供：米川正子



雨季のマラカル